

「半島地域づくり会議 in 幡多」開催概要

国土交通省都市・地域整備局
地方振興課半島振興室

多くの共通点を持つ各半島地域の住民、行政関係者等が一堂に会し、情報・アイデアの交換、半島地域の活性化のための知見と問題意識の共有を図り、自立的な地域づくり活動の実践につなげることを目的に、一昨年(2019年)の能登地域、昨年(2020年)の宇土・天草地域に続き、高知県幡多地域を舞台に「半島地域づくり会議 in 幡多」を平成 21 年 1 月 31 日(土)～2 月 1 日(日)の 2 日間にわたり開催し、以下のプログラムを実施した。

－ 1 月 31 日(土) プログラム － 【フィールドワーク】

事前に申込があった全国の半島地域、及び地元高知県内から約 70 人(地域づくり団体、行政関係者等)が 3 地区にわかれて参加した。各サイトでのプログラム終了後、食談義を開催する土佐清水市窪津に移動し、「総括ディスカッション」で各サイトでの成果を報告・共有した。

●四万十市片魚サイト：

子どもの農村体験、民泊体験の受入れへの取り組みを学ぶとともに、プログラムとして提供している食づくり体験を通じて、体験交流による地域・来訪者相互の多様な効果、価値について考えた。

●三原村サイト：

地域の高齢者とともに森林の散策や間伐体験、地域食の体験などを行い、地域住民を含めた地域の多様な資源の再認識、活用のあり方について学んだ。

●宿毛市・大月町サイト：

海を活かした屋外プログラムが充実した同地域で、オフシーズンのプログラムのあり方を議論。強風のため海上交通での移動を中止したことをきっかけに、風など負の資源を活用する方策を考えた。



フィールドワーク(四万十市片魚サイト)



フィールドワーク(宿毛市・大月町サイト)

【幡多の食談義・民泊(1月31日)】

土佐清水市窪津地区にて、幡多の海・山・里の食材を活用した郷土料理を味わいながら、参加者同士で交流を深めた。尾崎高知県知事の飛び入り参加もあった。

その後、民泊体験として、参加者は窪津地区と隣接の津呂地区の一般家庭(12 家庭)に分泊、それぞれの家庭でさらに交流を深めた。



－ 2月1日（日）プログラム －

【全体会議】

2日目は、ふるさと総合センター（黒潮町）を舞台に、公開での会議が行われた。会議に先立ち、尾崎高知県知事からもご挨拶をいただいた。

出席者は約 250 人（延べ人数）。



開会挨拶をする門野大臣官房審議官

●半島地域からの事例報告●

◎ 苺をまるごと活かした地域の特産品開発と、モノだけではない作り手の“想い”を届ける取り組み

[大月町 苺氷り本舗株]

◎ 四万十川「龍」を下るドラゴンランで、地域の資源・人との交流を楽しむ

[四万十市 四万十ガイア自然学校]

◎ 千枚田保存を出発点に体験、交流、モノづくりに広がる地域活性化の取り組み

[千葉県鴨川市 NPO 法人大山千枚田保存会]



「半島地域づくり会議 in 幡多」全体会議会場

●徹底討論●

◎ テーマ ‘幡多らしさ・半島らしさを表現する ～柔軟でしなやかなネットワークをめざして～’

◎ 出演 コーディネータ 渋澤 寿一氏（NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会）

パネリスト 梅原 真 氏（梅原デザイン事務所）

大原 泰輔氏（NPO 法人高知県西部 NPO 支援ネットワーク）

八木 和美氏（法政大学大学院エコ地域デザイン研究所）

八木 雅昭氏（NPO 法人高知県西部 NPO 支援ネットワーク）

山下 慎吾氏（空間生態研究所）

◎主な発言

（渋澤）ニュースをみると「少し世の中おかしくなっている」と感じることが多い。かつて日本は自然の成長量の中で楽しみ、文化をつくって、暮らしてきた。高度成長期を境に、海外に物を売って海外に依存をしながら暮らす形に急激に変わった。それで本当によかったのか？を問われている。

半島地域は、森と里と川と海が全部自前であって、それらを全部うまく使いながら暮らしをつくってきた。高度成長期に角を曲がり間違えなかったらどんな日本があったのかを考えると、半島からもう 1 回スタートすることが大きなテーマ。半島地域はこれからの日本、世界に対するトップランナーの位置にある。暮らし、価値観の大きな転換点にある今日、半島から何を世の中に出していくのか。

（梅原）「端っこにはとても魅力があって、そこはとてもおいしそう」と半島をとらえている。内

陸からの交通路になった時点で半島は末端の端っこになったが、海路の時代には、むしろ先端、先っちょ。先っちょと端っこが混在しているのが半島。

(八木(雅)) 中間支援団体として、広域的にネットワークして地域づくりをやっている。異分野・地域で活動する人・団体と協働して幡多地域全体を考えていきたい。地域づくりは、そこに暮らす住民が主体的に地域づくりにかかわっていくことが大事。

(大原) 地域づくりのひとつの手法としてのエコツーリズムの振興をめざしている。交流を通じて地域の人々を元気づけながら、少しでも経済的な基盤を強くしていきたい。幡多で当たり前の食材が、高知市では一定の努力をしないと手に入らない状況。「自立する食」、「高知は高知で地元のおいしいものをみんなで食べられる」をつなげたい。幡多の住民方とおいしい幡多をみんなで確認し合えるような教材にしていきたい。

(梅原) 高知県の西南である幡多は資源の宝庫。ひとつの生き方に結びつけられる。地域が「こういう生き方をしている」というアイデンティティをメッセージにしなければ。自分たちの考え方のメッセージ、コミュニケーションする言葉を自分たちが発信しているか。個性があるのに幡多、高知県が見えてこないのは、アイデンティティがないため。

高知県は森林率 84%と日本一、これにかけて「84 (はちよん) プロジェクト」を提案している。山は赤字の山だったが、今はCO₂ を吸収する装置。頭を切り替えて逆にスイッチを入れる。山仕事のおじさんの背中に「84」と書く。「その84は何」と聞いたら、「わしらあ日本一の森林で働いてんのやぞ」。商品売るのはない。おじさんのメンタリティが元気になることが一番。84のアイデンティティを核に観光や教育につながる。

(八木(和)) 地元の人に「もう少し幡多のことを勉強してきてほしい」と言われ、都市から訪問する人間の課題を考えている。地域との関係づくり、何をお返しできるかを意識している。

エネルギーも食料も水も地域での地産地消が非常に大切で、グローバリゼーションの一方でローカリゼーションの視点、「本当の幸せとは？」の問い直しが生まれている。活動のネットワークを広げていくときには、3人くらい集まったらすぐに行動していけばいい。「風の人・土の人」に加えて、「風の人と土の人だけでは砂漠化するので、水の人が大事」の発想がある。これに加えて、色のない人、コトをつなぐ・触媒になる人も必要だ。

(洪澤) 幡多には何でもある。これをどうやって外へ出していくかが、今問われている。

(山下) 「深化するマップ」として幡多の地図を1から作っている。ここにこんな細い道がある…を個人が登録して情報を持ち寄り地図を1から作ることで、深い幡多が見えてくる。しかし、実際に来てもらう、地元の人に話を聞くのがやはり一番。昨晚、土佐清水の漁家に泊まって飲んでいるときに言われたのが、「宣伝ではなく、口伝にしろ」。楽しさを伝え、地元に来てもらおうきっかけとしていきたい。

(洪澤) 言葉で伝えるだけではなくて五感全部で伝えるのが、口伝。幡多の魅力を口伝で世の中に伝えていくことは、全く新しいひとつの切り口になってくる。梅原氏のアイデンティティによるコミュニケーションにも通じる。

(会場) 半島同士がつながりながらネットワークがさらに強化されていけば、もっと違った日本、あるいは違った環境をつくっていけないのではないかとの想いを持った。

(洪澤) 半島間のネットワークづくりも含めて、これからの幡多に対する助言・夢を。

(八木(和)) 「つなぐ」を意識的に、触媒になる人がメンバーの中に入ることによってネットワークは広がっていく。つなぐ人を育てることが必要。

(八木(雅)) 地域の協働が大事。住民と行政、企業を含めて地域をきちんと見て、同じ土俵で取

り組むために、縦割りを横につなぐネットワークが必要。

(大原) この高知で暮らしが立てられる職場、職業といった包容力を備えた地域をつくりたい。

(梅原) 冒頭の曲がり角の話、二股の道と言い換えると、右に行くか左に行くかの局面があった。

右を選んできた人類の道は少し違うのではないかと思いつけている。この道の行き先が分からなくなっている。半島は遅れているが故に二股の地点に戻るのに近い。遅れたと言われる半島が真実に近いところにおいて、そこにはとてつもない個性がある。今はアイデンティティーを持ち得ていないが、官民の得意なところを活かして協働して矢印をつくり、コミュニケーションの矢印をつくれればいい。

(洪澤) 民俗研究家・結城登美雄が沖縄で学んだ5つのことを紹介したい。1、「あたい」。自給用の畑、自分の食べ物は自分で作るということ。2、「ゆんたん」。縁側、自分たちの共同体のコミュニケーションの場がなくてはならない。3、共同店。他の店よりも高いが買う。行政に依存するのではなく、店の利益を貯めて工場の資本金やスクールバスの購入に充てるシステムがある。4、「ゆいまーる」。西部ネットがやろうとしている「みんなで地域をつくろう。暮らしは与えられるものではなくつくるもの」ということ。5、「てーげー」。「ぼちぼち、楽しみながらやろう」ということ。地域の人々が楽しみながら暮らしているのを見に人々が訪れる。自然は10分で飽きるが、人間は一生飽きない。そこに住んでいる人たち、人間を見せていくということが一番のコミュニケーションであり、商売なのではないか。



パネルディスカッション



【ファーマーズ・マーケット in 幡多】

同時開催イベントとして、安心・安全な食づくり・モノづくり、暮らしづくりをめざしたい生産者やグループ、市民等が出店する「ファーマーズ・マーケット」を開催。地元の食材、食材を活かした加工品、工芸品等45の出店者があった。